【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和５年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	佐賀市立城南中学校

1　前年度 評価結果の概要	・「不登校対策」において、成果指標（数値目標）を達成することができなかった。その他の項目については、「ほぼ達成できた」「概ね達成できた」と評価でき、全体として良好な教育活動が展開できたと考える。 ・「不登校対策」では、学校が安心できる場であると生徒が感じられるよう、登校できていない生徒への支援を充実させることで少しずつ好ましい方向へと導くことと、未然防止と早期発見に努めることが大切と考える。しかし、生徒本人の学習や人間関係の問題だけでなく、家庭的な問題等、多岐にわたる要因があり、対応が難しい面のある。また、担任だけでなく全職員の共通理解を深めていくことが課題である。 ・前年と同様、コロナの影響で学校運営協議会の部会における活動が、制限された事が残念であった。また、生徒達における「コミュニティ・スクール」としての認知が低いことが課題である。
2　学校教育目標	**『城南中学校生徒としての誇りをもち、たくましく生きる生徒の育成』** **～「城南魂をもち主体的に学び、人の気持ちのわかる人」の育成を目指して～**
3　本年度の重点目標	**・主体的な学習者を育む学習指導方法として、『学び合い』の考え方を軸とし、特別支援教育の考え方を取り入れた授業の実現を図る。** **・不登校を減らすために生徒指導の三機能を基盤にした開発的生徒指導の充実を図る。** **・学校教育力向上を目的とした、地域との連携（城南中学校運営協議会、城南豊夢学園運営協議会）の活性化を図る。**

4　重点取組内容・成果指標　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○『学び合い』の考え方を軸とした授業の実施 ○家庭学習の充実	○授業において、「自分だけでなく、みんなが分かる（孤立させない）ことを意識して取り組めた」と回答した生徒80%以上 ○「自分で計画し、家庭学習を行った」と回答した生徒80%以上	・全職員で、『学び合い』の考え方を軸とした授業を実施する。 ・家庭学習について考えたり、友人の学習法を学んだりし、自分の計画を立てさせる。	B	・「自分だけでなく、みんなが分かることを意識して取り組めた」と回答した生徒が77.0%、「自分で計画し、家庭学習を行った」と回答した生徒が48.8%と中間評価をそれぞれ3.6ポイント、2.2ポイントと下回っていた。効果的に家庭学習に取り組めるように、学活や教科指導で支援を行い、学力の向上に努めたい。	B	・学力調査等において、上向きになっていることは評価できる。生徒のアンケートからも「授業がわかり学力を高めるよう努力している」との回答が7．8割と上がって来ており適切である。学習指導方法の中心に「学び合い」を掲げるのであれば、学力向上に係る評価の材料として、「学び合い」の考え方を軸とした授業の有益性等について、生徒や保護者、教職員アンケートの項目に、追加すべきではないか。
●心の教育	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした生徒を85%以上とする。	・人権講演会（人権集会）や道徳に関するアンケートを実施する。 ・道徳利の授業づくりに関する校内研修等の実施する。	A	・今年度は、3学年共通した道徳のテーマを各学期1回ずつ実践することができた。また、肯定的な意見が94.5%となり、前年度と比較をして10%以上アップしている。来年度は、研修など教師側の道徳的実践力が向上するような取り組みを実施したい。	A	・道徳教育のテーマを3学年共通としたことで理解が進んだ。道徳の取り組み内容の中に、「自分以外の人の為に目標を持ち、行動することの大切さ」について考えさせて欲しい。キャリア教育にあるキーワードの「夢」を「志」に変えてみると、個人の夢からもっと大きな視点での目標に変換できると思う。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等）について組織的対応ができていると回答した教員を85%以上とする。	・いじめに関するアンケートをネットを使用して行い、早期発見、早期対応を行う。 ・いじめの対応についての研修・会議を年間に5回以上行う。	B	・いじめ防止等について組織的対応が概ねできていると回答した教職員が100%であった。昨年よりいじめ発生件数は10件程度少ないが、組織で対応することができた。教育相談や生活アンケートを活用し、生徒に寄り添い、相談しやすい環境を作っていきたい。また、道徳の授業を継続的に行い、道徳的心情を育んでいきたい。ただし、いじめに関するアンケートをネットを使用して行なえるようにできていないため、進めていきたい。	B	・いじめ防止についても組織対応が概ねできているとの回答が100%だったことは大変良い。 ・いじめや不登校の早期発見、早期対応体制に向けた組織対応は適切である。 ・いじめが起こった時に生徒や保護者が、職員に情報提供しやすいようなシステムの構築を希望する。
	●生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした生徒80%以上	・授業や各行事のリーダーを実行委員とし、出番・役割・承認を補償する。 ・SCによる生徒への心理教育を実施しする。 ・キャリア教育の充実	A	・「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した生徒83.3%と安定して80%以上である。「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした生徒は70.1%と微増している。また、「夢や目標について主体的に学びあう」項目について、75.4%肯定的であるので、学年の終わりに実施される心理教育やキャリア教育をより主体的な学びへと導いていきたい。	A	・「キャリア教育」について、一般的に認知度の低い仕事の講師も招聘し、日常の暮らしでは出会えない方の話を聴かせて欲しい。憧れが目標になり、目標があることで意欲的な行動が取れると考える。大人である私たちが模範を示すこと、例えば前向きに人生を楽しむことや、他者に真摯に接すること、社会に関心を持つことなど、いろんな事を見て感じる年代に、いい影響を与えられるようにしたい。
	○不登校の未然防止・早期発見・早期対応に向けた組織対応	○月別報告書において、全校の不登校生徒の割合を3%以下とする。（前年度4．9%）	・定期的な教育相談アンケートやQUアンケート等を活用する。 ・専門性をもつ外部人材を活用した職員研修や生徒講話などを実施する。 ・SCやSSW、サポート相談員や関係機関、地域との連携を強める。	B	・12月末までの不登校による累積欠席日数が30日以上の生徒は37人で、割合は6.8%である。しかし、教職員の未然防止や改善に向けた取り組みにおける肯定的な回答は96.6%であり、全職員で取り組むことを意識することができた。また、定期的にケース会議を実施するなど、SC、SSW、サポート相談員、関係機関との連携をすることができた。心理教育やQ-Uの活用など未然防止に対する取り組みや校内研修をより一層強化して、未然防止に取り組んでいきたい。	B	・成果指標達成はできなかったが、未然防止や改善に向けた取り組みの必要性が全職員へ周知されている。学校に通うことが絶対ではないという考えの表れなのか、親が子供を甘やかしているのか、ただ、あくまでも数字だけにとらわれてはいけないと思う。対策は子供だけでなく家庭や親へのサポートも大切である。SSW等のあらゆる機関と連携を取られているとのことであるが、マンパワーの充実は必要不可欠であり、今まで以上に予算措置を求めなければならない。
●健康・体つくり	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」 ○「望ましい生活習慣の形成」	●「健康に良い食事をしている」生徒80%以上 ○朝食をとって登校する生徒85%以上	・調査、食に関する意識、生活状況調査の実施 ・食育に対する講演会の実施 ・保健だよりの発行 ・生徒会を中心とした健康づくり、体力づくりへの取組みの活性化を図る。	B	・「健康に良い食事をしている」は、「よくあてはまる」が50.6%、「だいたいあてはまる」を含めると88.7%である。「朝食をとって登校する生徒」は、「よくあてはまる」が76.8%、「だいたいあてはまる」を含めると90%である。大きな変化は見られなかった。引き続き、家庭と連携した お弁当の日プロジェクトを生徒会中心で行い、技術・家庭科の授業の連携も踏まえて食育を推進していきたい。	A	・食育に関する成果は、「弁当の日」の設定や講演会開催によるものではないか。このようなアウトカムが得られているのは、PDCAサイクルを学校運営協議会に語られているからだと思料する。 ・生活状況や食に関する意識調査及び保健だよりなど組織的な働きかけも適切である。自己評価結果も妥当。取り組み状況についても適切であった思うが、自己評価が数値目標に到達していなくて低くなったのはやむを得ないかもしれない。
	○「安全に関する資質・能力の育成」	○生徒の交通事故を0（ゼロ）にする。	・交通安全教室の実施と自転車点検を保護者と連携して充実させる。	B	・大きな事故はなかったが、自転車の交通マナーについて地域から連絡を受けることが多かった。今後も、交通ルール・マナーの違守と、施錠の徹底などについても指導をしていく。	B	・日常の注意喚起と指導が必要である。また、車道管理者の国・県・市に対し交通安全施設の充実について毎年要望する必要がある。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ・月間平均時間外勤務時間数を月45時間以下とする。 ・全職員年休6日以上の取得	・成績2期制の実施による、成績処理業務・通知表作成業務の縮減を図る。 ・校時限を変更し、会議開始時間を早める。 ・部活動時間の短縮を図る。 ・時間外勤務時間数が45時間を超えた職員人は、管理職面談を行う。	A	・月間平均時間外勤務時間数が月33.6時間と成果数値を下回ることができた。また、年休取得についても、職員全体の平均で12.6日と、成果数値の6日を大幅に上回ることができた。 ・毎週水曜日を定時退勤推奨日にしたが、あまり効果がでていないので、職員の意識が変わるように取り組みをより一層強化していきたい。	A	・時間外勤務時間の削減など着実に進んでいる。働き方改革については、教職員自身の意識改革が必要なことから、在校時間の制限や、時間外勤務が多い教職員への管理職面談は有効であった。また年休取得率も目標を大きく上回っており、教職員の意識改革が浸透している。今後も働き方改革などを通じ、人間的な生活を回復し、より豊かな教育活動に専念できる環境づくりを期待する。
	○文書処理の校務サーバーの利活用	○校務サーバーを使った文書データのやり取り、保存、整理をすることができたと答える職員を85%以上とする。	・職員間の文書データのやり取り、保存、整理を校務サーバーを通して行う。	A	・再度、校内研修を行い、データ保存の方法を確認した。校務サーバーを使った文書データのやり取り、保存、整理をすることができたと答えた職員が96.5%で、1人を除いて、行うことができている。今後は、データの保存をサーバーだけでなく、クラウドの活用を勧め、作業の効率化や業務改善につなげていきたい。	A	・情報漏洩防止の自覚により、職員の校務サーバー利活用のパーセンテージが上がったことは、評価に値する。リモートワークや、他の職員のフォローのための、校務データー活用もみられ、活用の幅も広がってきている。今後、サーバーのみならず、クラウドの活用による作業能率の効率化や業務改善に期待する。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
○開かれた学校づくり	◎地域を愛し、地域に愛される生徒の育成 ・城南中学校運営協議会、城南豊夢学園運営協議会の活性化 ・家庭や地域との連携、小中連携の取組の深まり	◎地域のニーズや要望をしっかりと踏まえ、地域と共生、協働をめざす。 ・学校行事、学年行事などへの保護者の参加率を60%以上とする。	・CS協議内容を十分に検討し、豊夢学園のプロジェクトを推進し小中連携の 充実を図る。 ・学校行事の日程や内容を不断に見直し、保護者の「見てみたい」「参加したい」という意識の高揚につなげる。 ・メールシステムとネットを活用し、保護者のニーズや意識を調べ、学校運営に生かす。	A	・今年度から学校行事、学年行事への参加に制限がなくなり、保護者の参加数が増えた。文化発表会・合唱コンクールへの保護者参加は174名(32%)で、昨年度より42名増えた。豊夢学園行事として、クリーン大作戦やドリームスクールⅠ、Ⅱも無事に実施することができ、家庭や地域との連携の絆が深まり、小中連携の取組も深まりを見せることができた。 ・コミュニティ・スクールへの承認度は、昨年度に比べ保護者8%、生徒2.2%上がり、職員は、4.2%下がった。 ・保護者・生徒・職員ともに前向きではあるが、職員は小中連携を通しての学習面・生活面の問題解決は難しいところがあり、また、地域行事が土日に集中しているため、部活動へ従事している職員の参加は難しい。職員も地域も無理なく運携できる可能性を今後考えていく必要がある。	A	・小中連携した出前あいさつ、クリーン大作戦、ドリームスクールなど無事に実施でき、ボランティア活動への生徒の参加率が高かったことはよかった。 ・地域連携については、地域行事も以前のように執り行われるようになり、生徒の意識も肯定的な意見が見られた。保護者に関しては、教育効果を高めるための学校の地域交流等方針について、理解が前年より大きく浸透している。 ・コミュニティ・スクールを通じて、家庭、地域と一体となった教育活動が行われており評価できる。ただし、コミュニティ・スクールの認知度が保護者については8割を超えているものの、生徒が5割を切り、生徒への働きかけを考えたい。教職員の承認度が下がっているのは残念。上がる努力を望みたい。 ・部活動を地域におろしていくために、地域の外部コーチをこの協議会に参加させることはできないだろうか。

●･･･県共通　○･･･学校独自　◎･･･志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・「不登校対策」において、成果指標（数値目標）を達成することができなかった。その他の項目については、「ほぼ達成できた」「概ね達成できた」と評価でき、全体として良好な教育活動が展開できたと考える。 ・「不登校対策」では、学校が安心できる場であると生徒が感じられるよう、登校できていない生徒への支援を充実させることで少しずつ好ましい方向へと導くことと、未然防止と早期発見に努めることが大切と考える。しかし、生徒本人の学習や人間関係の問題だけでなく、家庭的な問題等、多岐にわたる要因があり、対応が難しい面がある。また、担任だけでなく全職員の共通理解を深め、取り組んでいくことが課題である。 ・本年度から、コロナ禍前と同様に、教育課程や行事等が制限なく、通常通り行うことができた。また、コミュニティ・スクールを通じて、家庭、地域と一体となった教育活動を行うことができた。ただし、コミュニティ・スクールの認知度が保護者については8割を超えているものの、教職員や生徒が5割を切っていることが課題である。